

自然誌 だぶり 冬

Natural history

三重自然誌の会情報誌 131号

2022年 3月

コブシハバチ～津市久居一色町での記録

コブシハバチは、ハチ目ハバチ科でれっきとした「ハチ」ではあるが刺すことはなく、名前のおりコブシなどのモクレン科の葉を食べるベジタリアンな虫である。本誌129号で篠木善重氏からコブシハバチの被害報告があったが、我が家でも庭に植えたオオヤマレンゲ、ハクモクレン、シモクレン、タムシバが被害を受けていることを追加報告しておきたい。私には、毛もない、半透明のコブシハバチの幼虫はその見た目がどうしても受け入れられず、季節になると幼虫が発生直後の若齢の間に駆除するのが毎年の恒例行事となっている。それ故、その存在は特に覚えているところである。初見の写真を探したが、幼虫の記録は残念ながら見つからなかった。幼虫の確認の翌年以降、こいつが親か？と撮影したのが2014年4月27日である。以来、駆除の甲斐なく毎年発生している。篠木氏の報告では2012年の記録が報告されているが、同じころ津市久居一色町でも発生していたことになる。そもそも、三重県における本種の初報告は最近のことで(佐野明2021；ひらくら, 65 (1)), みえ生物誌-昆虫Ⅲ(三重自然誌の会2018)には掲載されていない。

さて、コブシやモクレンは公園木や街路樹として普通にみられるので、目につきやすいと思われるが、今まで記録がなかったのが不思議である。最近になって分布を拡大したのか、それとも単にイモムシとして駆除されてきたのか興味あるところである。幼虫たちはこれからが活発になる季節である。街路樹に目を向けてみてはいかがだろう。



写真 毛のないコブシハバチの幼虫(2016年5月4日撮影)とコブシハバチの成虫(右下, 2014年4月27日撮影)

(上田 利彦：津市久居一色町176-1)

三重県におけるアカイガレイシおよびシロイガレイシの記録

中 野 環

黒潮が熊野灘沖合いに近づくことが多くなったためなのか、ここ数年でホソスジウズラタマキビ、キバアマガイ、ハナワレイシ、リュウキュウノアシなど生息域の中心が南方にある種類の貝を三重県で確認しています(中野2020, 2021a, 2021b)。採集個体数は僅かなので三重県沿岸に繁殖定着しているかは不明ですが、アキガイ科の貝類2種を確認したので報告します。

1種目は、紀北町と南伊勢町で採集したアカイガレイシ *Drupa rubusidaeus* Röding, 1798です。アカイガレイシは、紀伊半島以南の岩礁域に生息する殻長約40mmの巻貝で(奥谷2017)、殻口内唇が赤色に彩られます。和歌山県串本町などで採集されますが、三重県では今回が初記録になります。採集した2個体は、何れも水深5m以深の場所に仕掛けられたイセエビ刺し網漁の副産物として得たもので、殻口が完全に形成されていない少し若い個体です(写真1,2)。

2種目はシロイガレイシ *Drupa* sp. です。本種は、伊豆諸島以南の岩礁域の潮間帯から潮下帯に生息する殻長約30mmの巻貝で、殻口は白色です。これまで三重県では須賀利、三木崎、二木島の干潮線～10mで確認されており(松本1979)、松本幸雄貝類コレクションには、尾鷲市須賀利で採集された2個体が含まれています(中野・松本2021)。今回、南伊勢町贅浦沖の水深10m以深の場所に仕掛けられたイセエビ刺し網漁の副産物として得た個体は、県内では東端の記録です(写真3)。

アカイガレイシ TNC - Mo.20847 南伊勢町贅浦沖水深-5m～
2021年12月5日 殻長30.75mm, 殻幅28.26mm

アカイガレイシ TNC - Mo.20867 紀北町紀伊長島沖水深-5m～
2021年12月18日 殻長30.26mm, 殻幅22.12mm

シロイガレイシ TNC - Mo.20495 南伊勢町贅浦沖水深-10m～
2021年3月20日 殻長35.08mm, 殻幅27.31mm

引用文献

- 松本幸雄1979. 三重の貝類(三重県産貝類目録). 鳥羽水族館, 179pp.
中野 環2020. ようやく手にした三重県産ホソスジウズラタマキビ. 自然誌だより, 125:6.
中野 環2021a. 三重県におけるキバアマガイの記録. 自然誌だより, 129:3.
中野 環2021b. 三重県におけるリュウキュウノアシおよびハナワレイシの記録. 自然誌だより, 130:3.
中野 環・松本至人2021. 三重の貝類を追求した人生～松本幸雄～(松本幸雄コレクション 貝類標本目録). 儀一屋(環), 97pp.
奥谷喬司(編著)2017. 日本近海酸貝類図鑑 第二版. 東海大学出版部, 1375pp.



写真1. 南伊勢町産アカイガレイシ(中野環コレクション：TNC-Mo.20847)

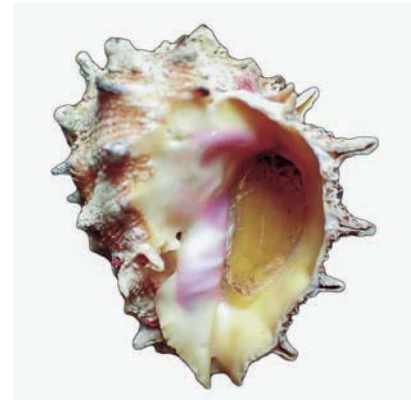


写真2. 紀北町産アカイガレイシ(中野環コレクション：TNC-Mo.20867)

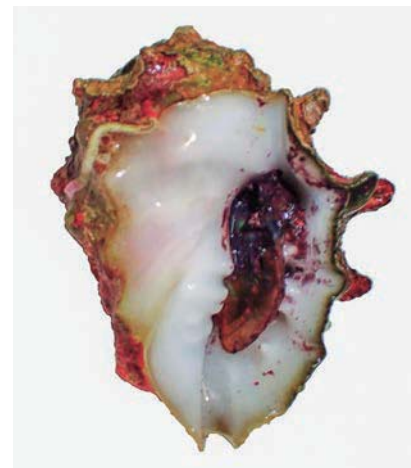


写真3. 南伊勢町産シロイガレイシ(中野環コレクション：TNC-Mo.20495)

(なかの たまき：度会町大野木1711-1)

冬、海辺で暮らすカルガモの群

今堀聖史

カルガモの群れが、冬の荒波が打ち寄せる突堤で休んでいるのに気づいて10年ほどたちます（写真1）。この群を観察できるのは伊勢市の村松漁港から明和町の大淀漁港間の浜ですが、宮川～櫛田川河口間の浜は幅が狭くて粗い砂礫なのでカモ類が好む場所は少なく、穏やかな天候の時は波消しブロックの上で休んでいます（写真2）。ブロックに生えている藻はカルガモの好物で、ブロック周辺の泥中にある生物も餌にしているようです。

カルガモの群が海辺で越冬するのは餌があるからです。一方、周辺の冬の刈田や灌漑用水路に水はなくカルガモの餌となる藻や植物はありませんので、餌のある河川やため池に移動し、田植えのころに戻ってきます。河口干潟や遠浅の海岸はアオサや干潟の生き物が豊富で雑食性のカルガモはよく採餌しています。

海辺で越冬するカルガモについていくつか疑問が浮かびます。その一つは、この群はどのように集まったのか？です。数羽～十数羽の群が近辺から集まって大きな群になったのでしょうか、河川やため池に行かないで海に来たのは何故か。小さな群があちこち見分して海に来たのか、偶然来たのか？と考えた末にたどり着いたのは、小さな群の中にいる成鳥が海の暮らしを経験して若鳥をリードしている、あるいは餌場の記憶が世代を越えて引き継がれているという推測です。

また、野生のカルガモの寿命は5～10年と推定されているので、10年で群の個体はほぼ入れ替わっていることとなります。いま、海辺で越冬している群の先祖が海で生きる術を得たのは遠い過去のこと、その後どれほどの年月が過ぎて今の群がいるのか想像するしかありません。周辺の農耕地の変遷がカルガモの生息数と関連があるのではないかと考え、過去の記録をさぐってみました。カルガモの生息数を推定できる資料は全く見当たりません。そこで、記録のある農地関係の事業を手掛かりにカルガモの生息数変動の推定を試みています。その内容は次の機会に記したいと思っています。



写真1 村松漁港の突堤, 2022.1.24



写真2 北浜海岸, 2019.1.29

(いまほり きよふみ：津市久居小野辺町1454-30)

ジネズミ *Crocidura dsinezumi* を粘着板で捕獲

モグラがネズミ用粘着板で捕れたので必要かと中優さんから電話をいただいた。せっかくの資料を捨てるという選択肢は私にはなく、届けてもらったところジネズミであった（写真1）。なんとか粘着板から剥がしたが、計測するのは難しかったのでそのまま液浸標本とした。標本収集の主旨をご理解の上、適切な対応をされた中さんに感謝する。

(清水善吉)



写真1 ジネズミ, 2022年3月5日, 南伊勢町押測, 中優・採集

三重県産シリアゲムシ科 Panorpidae (長翅目) 図譜

篠木善重

本県産シリアゲムシ科の既知の全8種をこれまでに採集している。種の同定をしていただいた富田靖男氏から標本が返却されたので、富田・篠木(2017)を参照して、全種を図示する。



図1. キシタトゲシリアゲ♂
Panorpa fulvicaudaria
2012.5.12 いなべ市宇賀溪



図2. キシタトゲシリアゲ♂の第6腹節背面後端の棘状突起



図3. キシタトゲシリアゲ♂
2012.5.27 菰野町朝明溪谷
春に出現



図4. ヤマトシリアゲ ベッコウ型♂
P. japonica 2014.9.15 菰野町田光
秋に出現



図5. ヤマトシリアゲ♂
2011.5.25 津市大洞山
翅斑に変化多い

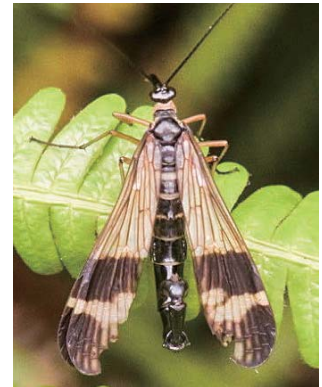


図6. ヤマトシリアゲ♂
2013.7.7 熊野市紀和町
楊枝川



図7. ホシシリアゲ♂
P. takenouchii 2014.7.29 大台町堂倉谷
♂腹背に長い1突起あり



図8. ミスジシリアゲ♀
2009.9.13 鈴鹿市入道ヶ岳
山地性



図9. ミスジシリアゲ♀
P. trizonata 2013.7.25
大台町大台ヶ原



図10. プライヤシリアゲ♀
P. pryeri 2013.8.12 大台町大杉
翅斑に変異多い



図11. プライヤシリアゲ♀
2014.6.1 菰野町朝明溪谷
別名プライアシリアゲ, プライヤーシリアゲ



図12. ホソマダラシリアゲ♀
P. multifasciaria
2013.7.29 大台町粟谷

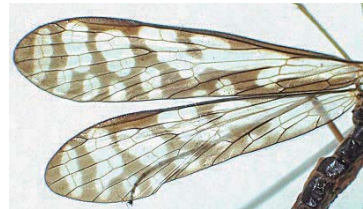


図13. キアシシリアゲ♀の左翅
2011.5.21 津市青山高原
翅の逆Y字紋は2条 翅の前縁
に基部から縁紋に達する縦条
が走る



図14. キアシシリアゲ♀
P. wormaldi
2014.6.1 菰野町朝明溪谷



図15. スカシシリアゲモドキ
端紋型♀ *Panorpodes paradoxus*
2012.5.20 大紀町錦



図16. スカシシリアゲモドキ
無斑型♂
2012.5.12 いなべ市宇賀溪



図17. スカシシリアゲモドキ
網斑型♀ 女性の翅斑は多型.
2012.5.27 菰野町朝明溪谷

文献: 宮本正一 1988. シリアゲムシ科昆虫の検索表. *Panorpodes*, (8/9):39-46.

富田靖男・篠木善重 2017. チャタテムシ目, 広翅目および長翅目昆虫の記録. ひらくら, (454), 49-55.

(しのぎ よししげ: 津市河芸町中別保 2230-1)

志摩地域に生育するイブキジャコウソウ等の生育現状

長谷川 好昭

マルバチシャノキ、ハマジンチョウ、イブキジャコウソウは、三重県においては志摩地域でのみ生育が確認されており、三重県レッドデータブック2015で前2種は絶滅危惧 I A 類、後者は I B 類に選定されている。これら3種の生育現況について報告する。

1 マルバチシャノキ (写真1)

志摩市浜島町南張2022/2/23 (移植元) 7本 (樹径最大146~最小31cm)、同 (移植先) 1本 (同109~42cm) で記録。県内では志摩市浜島町だけに分布する。新しい道路の敷設に伴って数個体が移植され、移植先は海浜公園とトンネル脇の植込みの2か所。もとの生息地は海拔が低いため葉が潮焼けしているが、移植先の方は健全生育している。

2 ハマジンチョウ (写真2)

南伊勢町五ヶ所浦_獅子島2008/2/24 (大株)、同_五ヶ所神社2022/2/23 (中株)、同_海岸 (大株) 同_水路 (小株)、同・飯満_墓前 (大株)、同_入り江 (大株)、同_海岸 (中株) 同・中津浜浦2008/3/7 (小株)、同・船越2010/10/23 (小株)、志摩市大王町_波切漁業協同組合前2022/2/24 (大株) で記録。県内では南伊勢町の獅子島やその周辺に生育する。過去に、絶滅防止の為に分散計画があり、個人の庭も含み各地に移植された、確認していた中津浜浦の小公園や船越の海岸の生育地は環境が合わなかったのか消滅した。元株は五ヶ所湾の小島の獅子島にあり、県指定天然記念物なので上陸には許可を得なければならない。株分けでしか増やせないの、移植はすべて同じ親株である。なお、もとは御木本幸吉氏が真珠養殖の際に九州辺りから持ち帰ったと言う噂もある。

3 イブキジャコウソウ (写真3)

鳥羽市安楽島町_高山 宿泊施設の前の切割2022/2/28 (小規模)、同 空き地の下の切割 (大規模)、菅島町_大山2011/10/16 (様々な規模で山麓に点在) で記録。県内では志摩市および鳥羽市で記録がある。志摩市の記録は古く現況は不明であり、鳥羽市でもかつては離島や丘陵地に生育していたが、開発圧を強く受け現在は若干が残存している状況である。本種の保護に尽力された故・岡興一氏に筆者も同行し、宿泊施設に説明して保護をお願いした。また、空き地は持ち主に了解を得た上で、新聞社に事情を説明し保護をお願いしたところ、ラミネート加工の注意銘版を作成し、現地に設置いただいた。宿泊施設の前の切割の個体群は、宿泊施設が撤退し草刈りがされなくなったことにより消滅した。

最後に、長谷川 (2012; 自然誌だよりNo.92) で本種についての発表後、興味を持たれた有限会社フローラトゥエンティワンの坂寄潮代表取締役および三重大学生物資源学研究所の水野隆文准教授は現地調査の際に我が家に寄られ情報交換を行い、それぞれの研究の状況をご教示いただいたことに感謝する。



写真1 マルバチシャノキ. 2011年8月12日, 志摩市浜島町南張



写真2 ハマジンチョウ. 2008年2月24日, 南伊勢町五ヶ所浦獅子島



写真3 イブキジャコウソウ. 2011年8月20日, 鳥羽市安楽島町_高山 空き地の下の切割

(はせがわ よしあき: 鳥羽市鳥羽1丁目23-4)

塩崎哲哉氏撮影のマーキング・アサギマダラ，標識情報

中西元男

元・虫屋だった陸貝屋の中 優氏から、「けーぶるにつぼん」という TV 番組が取り上げた長崎県のアサギマダラ・マーキング風景で「恐ろしい程飛んでました」というご感想をメールでいただいた。実際、最近“流行り”のフジバカマ園での誘引状況をみると、長年蝶の調査をやってきた者として、アサギマダラってこんなに多い蝶だったっけ？と目を疑うばかりの群飛をみせつけられる。旺盛な繁殖能力の持ち主である昆虫という生き物は、(普段虫屋が気づけないだけで)種の維持のため本来この程度の個体数を有するものなのだろう。それは、詳しい生活史など分からぬことが多い甲虫目の昆虫で、珍品と言われていたものが採集法の開拓と共にアツという間に普通種、駄物扱いに転落する事例が多いことから窺い知れる。このような生物に対して、一律に保護のための個体採集規制を持ち込むのはナンセンスの極みだと思うのだが、それはまた別の話。

昨(2021)年秋、県南に設置されたアサギマダラ誘引用フジバカマ畑、御浜町上野の道の駅「さぎりの里」近くのフジバカマ園でもおびただしい個体が誘引されていて(写真1)、一株に何十頭もがブラ下がり鈴なりに吸蜜する様は、さすがにここで捕獲してマーキングしようという意欲を萎えさせるに十分である。同地で塩崎哲哉氏が撮影された標識個体の写真をいただいているが、アサギ・ネットなどで判明している標識情報を報告しておく。貴重な資料をいただいた塩崎氏に感謝する。

・2021年10月30日 南牟婁郡御浜町上野 塩崎哲哉氏・撮影(記載は、雌雄別・「標識」←標識情報、標識地・標識月日・標識者・備考の順)

♂「カミゴウ9.24リノ4298」←群馬県東吾妻町三島・9月24日・井上 浩。

♂「アリタ(ダか?) 10.11 KI-4」←標識情報不明。

♂「ミエケンマツサカ10/23クボ05」←三重県松阪市飯南町粥見・10月23日・久保幸雄，久保文香。

♀「MN-148 10/24くまの」(写真2)←三重県熊野市金山町・10月24日・中西元男・この個体は後に鹿児島県喜界島で再々捕獲された。三重昆虫談話会誌「ひらくら」投稿中。

♂「アヤ10.6KHA1915」←京都府綾部市戸奈瀬町・10月6日・林賀寿美。

*

上記、中氏のメールは「蝶に関する話題2題」として、映画「女王陛下の007」に蝶の標本が出てました、というお報せもあった。上司Mのコレクションをみたジェームス・ボンドが「小さいタテハチョウだ」と評して「蝶にも詳しいのか」と感心されるシーン、これは前に虫誌で紹介したことがある。変装したホームズがワトソンの部屋を訪れ、書架の隙間を埋めるにふさわしい書籍として「英国鳥類」を勧めるくだり(シャーロック・ホームズの帰還)とともに、英国「紳士のたしなみ、基礎教養は博物学である」という、我ら自然誌屋にとって嬉しい名場面である。



写真1 御浜町上野のフジバカマ園(塩崎哲哉・撮影)



写真2 「MN-148 10/24くまの」個体(〃)

(なかにし もとお:松阪市新町959)

今さら聞けないラベルの話・続編

河 北 均

前回(本誌No.91)、昆虫の標本のラベルの話をしました。私は昆虫以外の他の動植物分野について、分からなかったのが、昆虫の標本が特殊であるということに気がつきませんでした。昆虫の標本が他の分野の標本と大きく異なるのは昆虫針にラベルを刺すという点です。他の分野では針などというものは使いません。昆虫ではデータラベル、同定ラベル、名称ラベル、所蔵ラベル、管理目的のラベルなど様々なラベルに分けて1本の昆虫針にラベルを刺しますが、他の分野ではラベルは1枚にすべてを記入しているようです。

植物ですが、データラベル、同定ラベル、名称ラベル、所蔵ラベル、管理目的のラベルを台紙1枚に記します。誤同定あるいは種名が変更になった場合はどうするのかと、某植物学研究者に尋ねたことがあります。昆虫だったら、針なので、同定ラベルをもう1枚追加すればよいわけですね。同定ラベルには同定年も記入するのが原則なので、将来時代が変わって種名が変更になったとしても経緯がわかるわけですね。某植物学研究者のお答えは単純明快でした。上にラベルを貼るだけでいいです。貼るとき、旧ラベルも分かるように貼れば、実質的に昆虫同様になり、問題はあっさり解決しました。他分野の方にも尋ねてみると勉強になるものですね。哺乳類、両生・爬虫類、魚類、貝類、クモ類、蘚苔類などほかはどうでしょうか？

今更ですが、前回(本誌No.91)に日付の表記と「coll.」、「leg.」のことを述べました。特に反応はなく、スルーされたみたいですが、これについても教えてください。些細なつまらないことですが、気になります。

些細なことついでにもうひとつ、昆虫ラベルの書き方については、解説がある(丸山2014;九州大学総合博物館研究報告12, 21-32など)が、そのなかで、月の表記について考えたいと思います。ローマ数字にするか、英語(略記)表記にするかです。ちなみにアラビア数字は論外…。ローマ数字にする場合、読みづらいので、英語(略記)表記にしたという意見をよく聞きます。たしかにIIとIII、VIとVIIなどはラベルに印字すると分かりづらいです。また、IVとIXも勘違いしやすいです。Apr.とSep.としたほうがわかりやすいです。一見、英語(略記)表記のほうが理に適っているようにみえます。ところで、これらを論文にする場合があります。論文の場合、英文和文に限らず、ローマ数字が普通です。英語(略記)表記だとローマ数字に直さなくてはならず、2度手間です。初心者が2つの方式を覚えなくてはならず、合理的ではありません。私は論文との関連でローマ数字のほうが望ましいように思いますが、どちらも間違いではないので困惑しています。

(かわきた ひとし:伊勢市岡本1丁目17-18)

編集後記

編集作業中の今(3月中旬)は一気に春の陽気で、冬号を発行するのがはばかれるくらいです。早くに原稿はそろっていたのですが、年度末のわずかな繁忙と体調のやや不調(による怠慢)が重なって編集作業が遅れ、皆さんにお届けするのが4月になってしまいました。次号は定期の6月発行を遵守しますのでご容赦ください。定期刊行に向けて、皆さんからの積極的なご投稿をお待ちしています(善)。

自然誌だより131号 Mie Natural History Research Group News, No.131

発行日 2022年3月30日
事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17
清水善吉方 三重自然誌の会
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会
郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会
年会費 1,500円(個人)/2,000円(家族)
e-mail:shumizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp